

中山間地域総合整備事業地域埋蔵文化財発掘調査概要報告書

桧牧市場西垣内遺跡

坊ノ浦遺跡

樅原町文化財調査概要 24

2001

樅原町教育委員会

中山間地域総合整備事業地域埋蔵文化財発掘調査概要報告書

桧牧市場西垣内遺跡
坊ノ浦遺跡

榛原町文化財調査概要 24

2001

榛原町教育委員会

例　　言

- 1 本書は、1998年度（平成10年度）～1999年度（平成11年度）に実施した桧牧市場西垣内遺跡、坊ノ浦遺跡の発掘調査概要報告書（株原町文化財調査概要24）である。
- 2 発掘調査（現地調査）は、1998年（平成10年）10月19日に着手し、1999年（平成11年）12月6日に終了した。なお、本書の刊行は、2000年度（平成12年度）事業として実施した。
- 3 現地調査は、奈良県教育委員会及び奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、株原町教育委員会生涯学習課技師　柳澤一宏が担当した。
- 4 調査組織及び関係者は、「I　調査の契機と経過」に掲載している。
- 5 方位は、基本的には座標北を指している。
- 6 土層及び土器の色調は、「新版標準土色帖」1987年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修（財）日本色彩研究所色票監修）を参考にしている。
- 7 各遺跡の調査記録、出土遺物等は、株原町教育委員会において保管している。
- 8 本書の執筆は柳澤、一部を横澤慈が行い、編集は、柳澤が行った。

目 次

I 調査の契機と経過	1
1 桧牧市場西垣内遺跡調査の契機と経過	
2 坊ノ浦遺跡調査の契機と経過	
3 調査組織等	
II 位置と環境	3
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 桧牧市場西垣内遺跡発掘調査概要 II	6
1 位置と環境	
2 遺跡の調査	
3 まとめ	
4 抄録	
IV 坊ノ浦遺跡第3次発掘調査概要 II	18
1 位置と環境	
2 遺跡の調査	
3 まとめ	
4 抄録	

報 告 書 抄 録

I 調査の契機と経過

1 桧牧市場西垣内遺跡調査の契機と経過

桧牧市場西垣内遺跡は、中世の遺物散布地として「榛原町遺跡地図番号 2-626」として登載しているところであるが、榛原町が行う開発行為（ほ場整備工事）に伴う事前の「遺跡有無確認踏査」によってその範囲の広がりが予想された。この後、1997年12月に埋蔵文化財発掘通知が提出され、関係機関等が遺跡の取り扱い・発掘調査の実施方法等の協議を行ったところ、発掘調査を榛原町教育委員会が担当することとなった。当遺跡の遺構・遺物の状況が明らかでないため、まず、確認調査を実施することとし、その状況によっては、改めて協議を行うこととした。現地調査は1998年（平成10）12月24日に着手し、立会調査を含めて1999年（平成11）3月31日に終了した。なお、遺跡の名称は、大字名と地区名（垣内名）から桧牧市場西垣内遺跡とした。

2 坊ノ浦遺跡調査の契機と経過

榛原町自明・桧牧に所在する坊ノ浦遺跡は、縄文時代から中世の遺物散布地として遺跡地図に登載（榛原町遺跡地図番号4-3・奈良県遺跡地図番号103-51）しているところである。この遺物散布地内の大半において、榛原町を事業主体とする圃場整備工事が実施されることとなり、平成10年2月には埋蔵文化財発掘通知が提出された。その後、関係機関等が遺跡の取り扱い及び調査方法等を協議した結果、まず、遺構・遺物の有無を確認する試掘調査を実施し、その状況によっては、別途協議を行い、本調査を実施することとなった。

事務手続き等を経たのち、発掘調査（試掘調査）を1998年（平成10）10月19日より開始し、31ヶ所においてトレンチを設定した。試掘の結果、10ヶ所のトレンチ（第5・7・9・10・11・12・13・14・17・19トレンチ）において、多くの遺構・遺物を検出することとなった。このため、事業主体者（産業課）と遺跡の取り扱い等について、改めて協議を重ねたところ、10ヶ所のトレンチについては拡張し、1999年（平成11）度も引き続いて発掘調査（本調査）を継続することとなった。後述のとおり、多くの遺構・遺物を検出し、1999年11月14日の現地説明会を経たのち、1999年（平成11）12月6日に現地調査（発掘調査）を終了した。

3 調査組織等

1998年度・1999年度の現地調査及び2000年度の整理作業等の関係者は、次のとおりである（敬称略）。

総括教育長	田村義治
庶務事務局長	栗野雅治（～1999年10月）、池野 隆（1999年11月～）
教育次長	福井三男（～1999年10月）、山本米三（1999年11月～）
生涯学習課	
課長	中村好三（1999年11月～）
主幹	藤田ユミ子（～1998年10月）
課長補佐	林 宏典（～1998年11月）
	安達宗弘（1998年12月～）、打越明美（1998年12月～）

調査・整理

技師	柳澤一宏
補助員	井上好美、南信子、奥野信子、巽康彰、福角剛男、永野仁、横澤慈、上西高登、岡田諭、坂佳彦、井上雅善、楠田佳代、山岡政郁、向井理栄、谷村美樹子
作業員	池田圭子、遠藤晴見、遠藤久子、籠滝トシ子、櫻静子、粉川君江、粉川キミエ、城山巖、大門静、田中ヤエ、中谷喜代子、古川マサエ、古城シズ子、蔽内秀子
業務委託	㈱ワールド、㈱大門測量設計事務所、㈱アイシー、㈱アルカ
遺物写真撮影	佐藤右文
指導・助言	奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、泉拓良、伊藤寿和、今尾文昭、植野浩三、宇野隆夫、小泉俊夫、菅谷文則、伊達宗泰、辻本宗久
協力	坊ノ浦ほ場整備実行委員会、橿原町役場産業課



写真1 調査関係者（一部）

II 位置と環境

1 地理的環境

奈良盆地の東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では大字宇陀町、榛原町、菟田野町、室生村、曾爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」とも総称されている。口宇陀は標高300~400mの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも呼ばれ、大宇陀町、榛原町、菟田野町の大半がここに含まれている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの険しい山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。

口宇陀地域の主要河川は、西に宇陀川、東に芳野川があり、幾つもの小河川を合わせながら榛原町萩原で宇陀川本流となる。榛原町を後にした宇陀川は三重県で名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へと至り、大和川流域とは水系を異にしている。

榛原町の四周は概ね標高約400~800mの山塊に囲まれ、東は高城岳、三郎岳、室生村へと通じる石割峠があり、北は大和高原とを区切る額井岳、香醉山、鳥見山などの山々が屏風状に連なり、宇陀の地を見下ろしている。西は桜井市や大宇陀町、南は菟田野町となっており、丘陵稜線をもってそれぞれの境界としている。地形的にみれば榛原町の西半は口宇陀的、東半は奥宇陀的な様相を呈している。



図1 榛原町位置図

2 歴史的環境

宇陀地方は、「古事記」、「日本書紀」をはじめとする多くの文献に度々登場し、これらの内容等からこの地は軍事・交通の要衝であったことを窺い知ることができ、今に残る地名や伝承なども多い。また、榛原町を流れる宇陀川・芳野川・内牧川流域の各所には多くの遺跡が分布しており、発掘調査・分布調査を重ねるたびにその数も増加している。

これまでに、宇陀郡内では4点の有茎尖頭器が出土しており、うち、3点が町内からの出土となっている。これらは、縄文時代草創期に求めることができ、この時期が宇陀の歴史の初源であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これらの遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出土しているのみで遺跡の全容が明らかになつたものは少ない。このような状況のもと高井遺跡、坊ノ浦遺跡では、早期から後期にわたる遺構・遺物を検出し、当地における代表的な集落跡であったことが発掘調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は、沢遺跡、下城・馬場遺跡、大貝ヒジキ山遺跡、上井足北出遺跡をはじめとする数遺跡が知られているにすぎないが、後期の遺跡は比較的多く認められる。これらは、地理的制約のためか奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次代の古墳時代へと継続するものが多い。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓である台状墓は、これまでに野山遺跡群、能峰遺跡群、下井足遺跡群、大王山遺跡群、キトラ遺跡などで確認されている。弥生時代後期の集落としては、高塚遺跡、能峰中島遺跡、上井足北出遺跡、古墳時代の集落としては、先の遺跡の他、戸石・辰巳前遺跡、高田垣内遺跡、谷遺跡、石榴垣内遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や竪穴住居跡などが確認されている遺跡もある。

古墳時代前期の古墳は谷畑古墳、中期の古墳としては高山1号墳、シメン坂1号墳、前山1号墳などが発掘調査によって明らかにされている。後期となると古墳数は著しく増加し、ある程度の粗密があるものの、町内各所の尾根上には数基から十数基単位で分布している。5世紀後半から盛期を迎える古墳群は野山古墳群、沢古墳群、栗谷古墳群、大王山古墳群、丹切古墳群などが知られている。6世紀後半以降、今までの木棺直葬にかわって横穴式石室墳が築造されるようになり、丹切古墳群、能峰古墳群、石田古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめ、多くの古墳が発掘調査によって状況が明らかになっている。

横穴式石室にかわる新しい葬法として火葬墓が登場してくるが、最も代表的なものが、壬申の乱で活躍した將軍のひとり渡来系氏族でもある文祢麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌などの出土品は国宝となっている。

古代末には、宇陀においても荘園の開発が急速に進み、このなかで台頭してきた在地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が発展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・沢氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城、沢城、芳野城をそれぞれの居城としていた。また、小規模な城館跡も各所に点在しており、城館の廃絶後、中世墓地と化したところもある。いわゆる中・近世墓地は、まとまったところでは、大王山遺跡、能峰遺跡群、八咫鳥遺跡群、野山遺跡群などが発掘調査により明らかにされている。

紙幅の都合上、多くを述べることができないが、宇陀地域の「位置と環境」は、以前からも他の報告書等で触れられており、次の文献が詳しい。

- 『宇陀・丹切古墳群』 奈良県教育委員会 1975
- 『大王山遺跡』 横原町教育委員会 1977
- 『能峰遺跡群』 I 奈良県教育委員会 1986
- 『下井足遺跡群』 奈良県教育委員会 1987
- 『野山遺跡群』 I 奈良県教育委員会 1988
- 『高田垣内古墳群』 奈良県教育委員会 1991
- 『大和宇陀地域における古墳の研究』 宇陀古墳文化研究会 1993
- 『石榴垣内遺跡』 奈良県教育委員会 1997

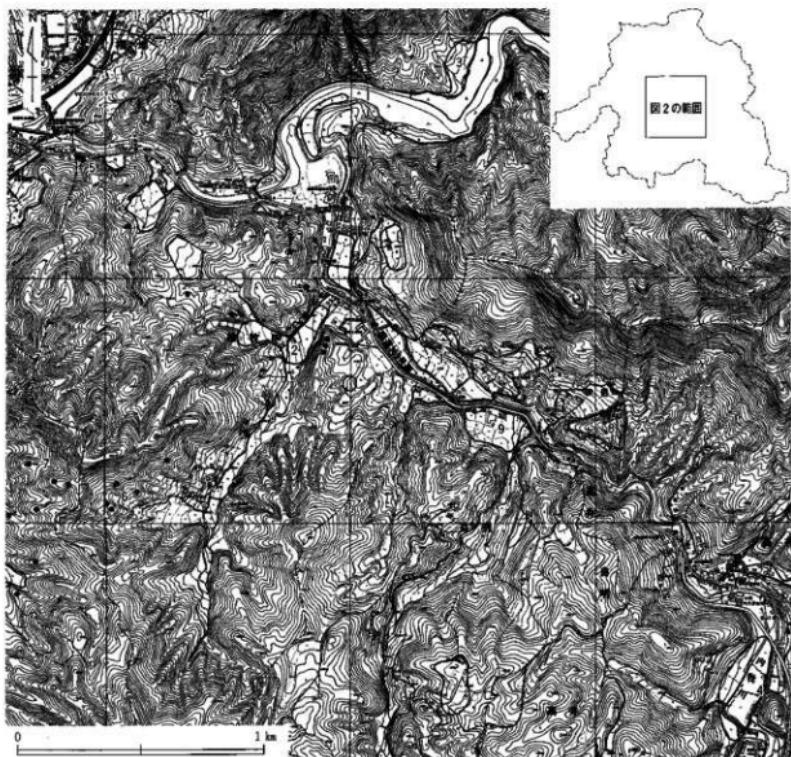


図2 周辺遺跡分布図

表1 主要遺跡地名表（図2参照）

分布図番号	遺 跡 名	種 別	時 代	備 考
1	坊ノ浦遺跡	集落跡、莊園跡、遺物散布地	縄文～近世	本書所収
2	桧牧市場西垣内遺跡	遺物散布地	弥生～古墳、中世	本書所収
3	桧牧遺跡	集落跡、遺物散布地	縄文～中世	
4	高井遺跡	集落跡、遺物散布地	縄文、奈良～中世	
5	不動堂古墳群	古墳	古墳	横穴式石室
6	西谷古墳群	古墳	古墳	横穴式石室他
7	ワラ田古墳	古墳	古墳	堅穴系横口式石室
8	桧牧城跡	城跡	中世	
9	自明廣田遺跡	遺物散布地	縄文、古墳、中世	

III 桧牧市場西垣内遺跡発掘調査概要Ⅱ

1 位置と環境

本遺跡は、棟原の市街地から南東約2kmに位置し、当地の主要河川のひとつである内牧川へと灌ぐ西谷川下流域に広がる。試掘調査は、西谷川本流とその小支流との合流付近を中心とした下流域（標高約313m～320m付近）をその対象としている。

遺跡下方の西谷川と内牧川との合流付近には、式内社の御井神社が鎮座し、「市場」、「馬場」等といった呼称も残されている。内牧川に添う国道369号線は、大和と伊勢とを結ぶ「伊勢本街道」でもある（図3）。

2 遺跡の調査

標高約313m～320m付近の水田を今回の調査対象としており、確認調査のトレンチを3ヵ所に設定した（図4）。各トレンチの概要是、「棟原町内遺跡発掘調査概要」1999年度に掲載したが、整理の都合上、出土遺物について詳しくは触れなかったので、本書に改めて掲載する。

(1) 第1トレンチの基本層序

基本層序は第1層が耕作土、第2層が水田床土、第3層が近代以降の整地土、第4層が旧水田耕作土、5層が旧水田床土、第6層がオリーブ褐色粘質土、第7層が灰オリーブ色砂礫の地山である（図6）。

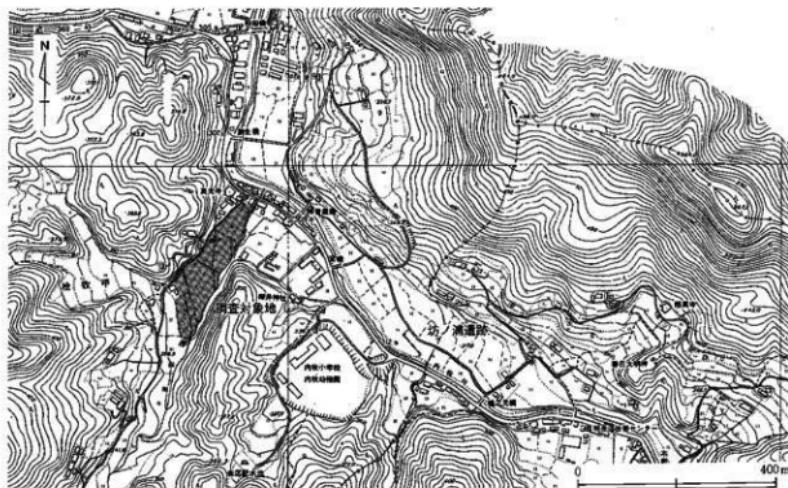
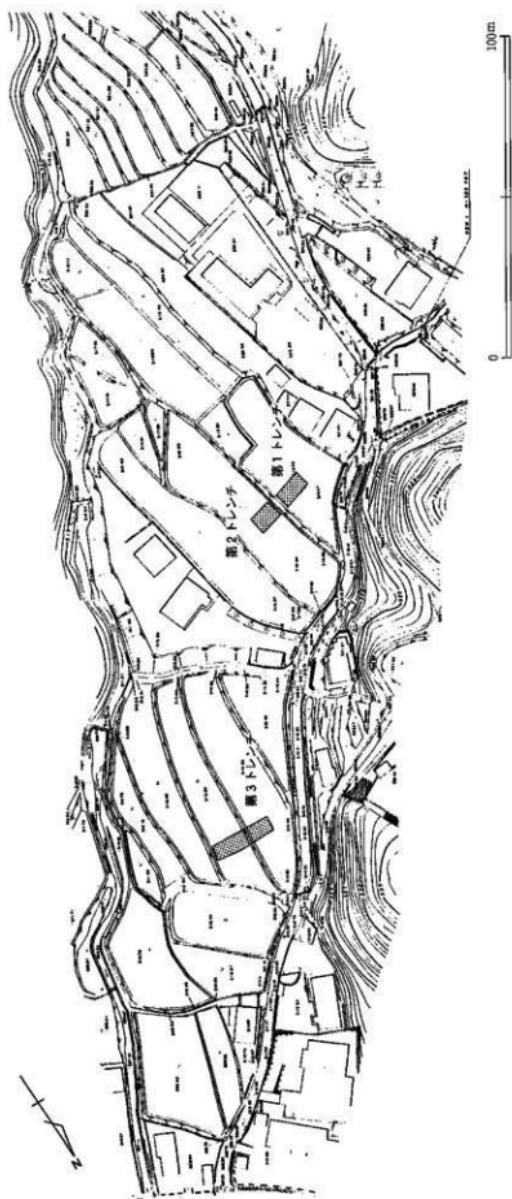


図3 桧牧市場西垣内遺跡調査対象地位置図

図4 檜牧市場西垣内遺跡調査位置図



(2) 検出遺構

第1トレンチでは、西から東へと流れる自然流路の南岸の一部を検出している(図5)。工事計画によると掘削等が自然流路検出面にまで及ばないことから、トレンチ西端において自然流路の土層・遺物等の状況の確認にとどめた。河道幅は明らかにできない。層序は基本的に砂と粘土の互層となっており、各層からは古式土師器等の遺物が出土している。最下層は植物遺体や種子、焼木片等を含むオリーブ黒色粘土となっており、湧水も多い。なお、護岸等の施設は認められない。この他、第3トレンチでは、中世の2条の素掘溝を検出している。

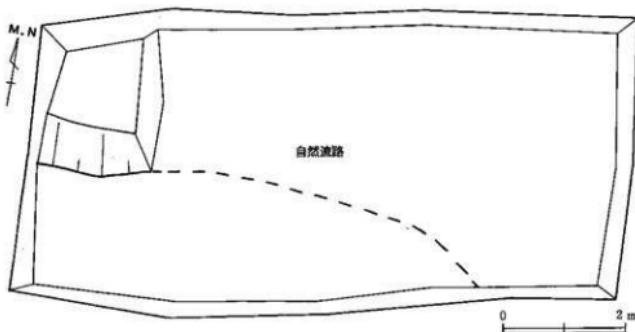
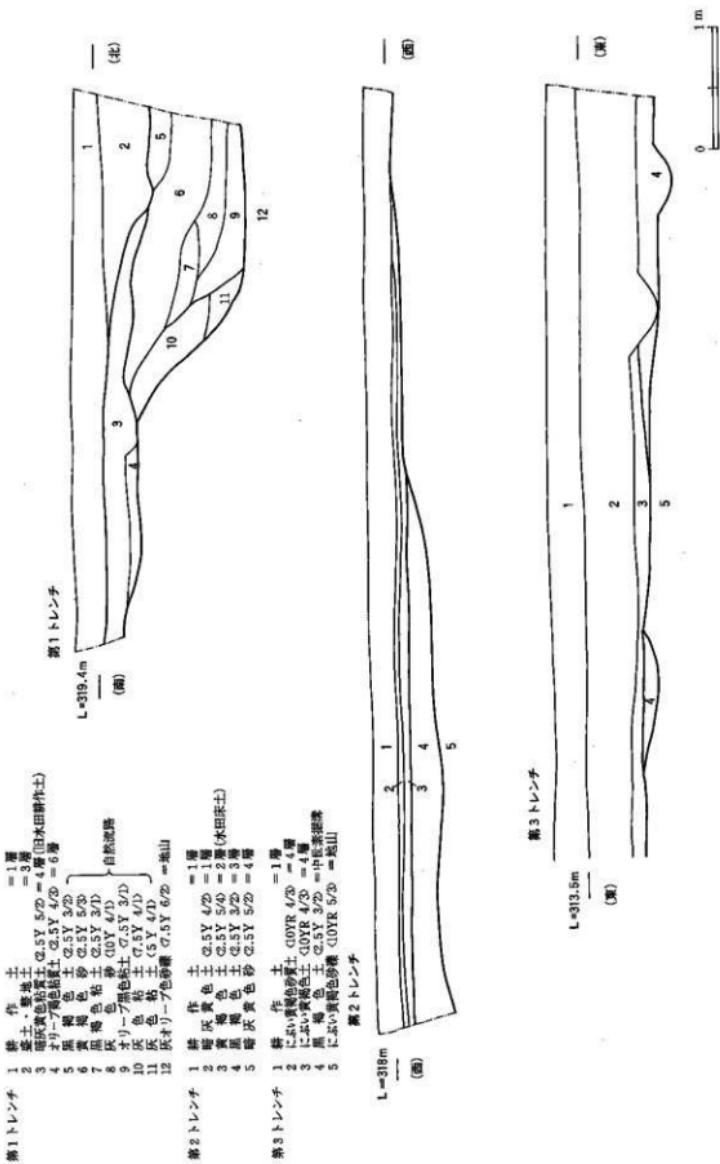


図5 桧牧市場西垣内遺跡第1トレンチ平面図

図 6 恒牧市場西垣内造跡土層断面図



(3) 出 土 遺 物

第1トレンチの自然流路内からは、古式土師器、自然流路南側のオリーブ褐色粘質土（第6層）からは、サヌカイト剥片、須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器等が出土している。第2トレンチからは、土師器、砥石、第3トレンチからは、須恵器、土師器、陶器、磁器等が出土している。これらのうち、図化できた遺物は、次のとおりである。

サヌカイト剥片（図7）

打点を欠損により失い、ポジティヴ面に蝶番剥離が認められる。側面には自然面が残る。長さ8cm、幅6cm、厚さ1.7cmである。第1トレンチからの出土である。

古式土師器（図8、表2）

1は直口壺の口縁部である。口縁部は外傾して開き、口縁端部は内側にやや肥厚する。内外面ともヨコナデを施す。

2～6は小形丸底鉢である。口縁部は内彎気味に短く外傾して開く。体部は扁球形を呈する。2の口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内外面ともナデ、底部外面には横位ケズリを施す。4の口縁部内面は縦位ミガキのうち横位ミガキ、外面は横位ミガキ、体部内面は横位ミガキ、外面は縦位ケズリのうち横位ミガキを施す。

7・8は小形器台である。7の体部は内彎気味に外上方にのび、口縁部は外反気味に立ち上がる。脚部との間に貫通孔をもたない。受部内面は縦位ミガキ、外面は横位ミガキ、口縁部は内外面ともヨコナデを施す。8の体部は内彎気味に外上方にのび、口縁部は外反気味に立ち上がる。口縁端部は内傾する面をもつ。体部下半はナデ、その他は内外面ともヨコナデを施す。

14は広口壺である。口縁部はやや外反気味に開き、口縁端部は丸い。口縁部内外面ともヨコナデを施す。

9～13、15は壺の口縁部である。9～13の口縁部は外傾して開き、口縁端部は内側に肥厚する。

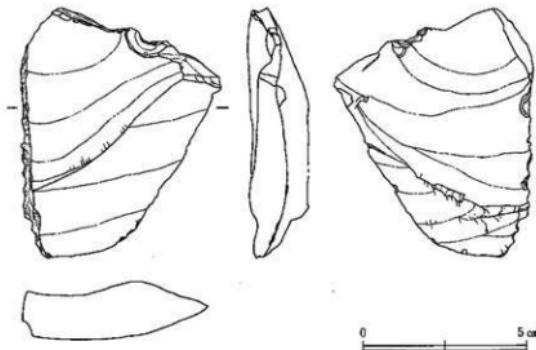


図7 桧牧市場西垣内遺跡出土サヌカイト剥片実測図

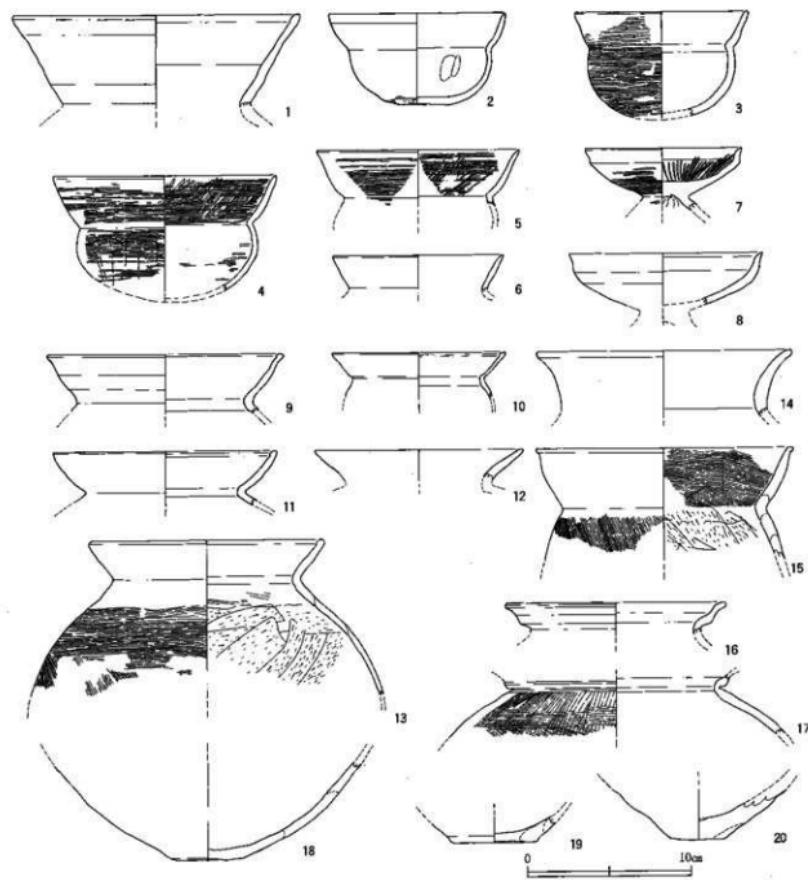


図8 檜牧市場西塙内遺跡出土古式土師器実測図

口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面ともナデを施す。13の口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面はケズリ、肩部内面は横位ハケのちヨコナデを施す。15の口縁部はやや内彎気味に外傾する。体部は張り出さない。口縁端部は外側に肥厚し水平な端面を形成する。口縁部内面はヨコナデ、外面は横位ハケ。体部内面は継位ケズリ、外面は継位ハケを施す。

16、17はS字状口縁亮である。口縁部は強く屈曲し、上段が外反気味に開く。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は継位ハケのち横位ハケ、内面はナデを施す。

18~20は壺の底部である。底部はやや窪んだ平底またはやや張り出した平底となっている。内外面ともナデを施す。

須恵器(図9-1、表2)

壺体部の破片である。内面に縁は同心円叩き文、外面には平行叩き目文のち横方向のカキ目を施す。第1トレンチからの出土である。

土師器(図9-2・5・6、表2)

2は広口型上釜で、口縁部を外反状に成形する。口縁端部は上方にのび、一部に面取りが認められる。内外面ともヨコナデを施す。内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色を呈し、復元口径24.2cm、現存高2.1cm、第1トレンチからの出土である。

5・6は第3トレンチ出土の土師皿である。5の口縁部は外傾状直線的に立ち上がり、端部は尖り気味である。底部は中央がやや窪む。内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色を呈し、復元口径9.8cm、現存高0.9cmである。6の口縁部は内彎気味に丸みをもって立ち上がる。底部はやや丸みをもつ。内外面とも橙色を呈し、復元口径8.8cm、現存高1.3cmである。

瓦器(図9-3、表2)

高台のみの破片である。やや外傾し、端部は丸い。暗灰色を呈し、復元高台径4.6cm、現存高0.8cm、第1トレンチからの出土である。

磁器(図9-4・8、表2)

4は楕の破片で、復元口径11.2cm、現存高2.4cmをはかる。口縁部は、やや内彎気味に外上方に

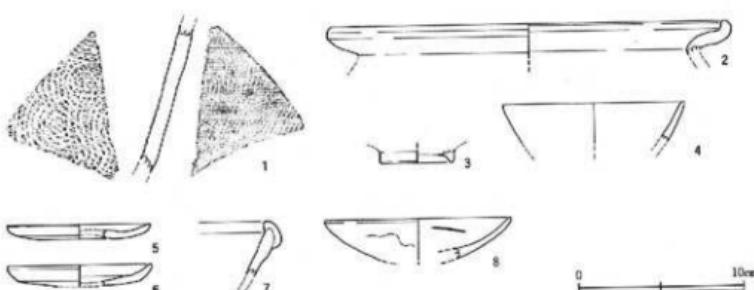


図9 桧牧市場西垣内遺跡出土土器類実測図

表2 桧枝市場西垣内遺跡出土土器観察表

括弧番号	器種・器形	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成・その他	出土位置	
8-1	古式土器 直口壺	復元口径 現存高	17.6cm 5.7cm	口縁部は外傾して開く。口縁端部は内側にやや肥厚し丸く仕上げる。	口縁部内外面ともヨコナア。	色調 内面:灰黄褐色 外面:にぶい黄褐色 胎土 密 焼成 良好	第1トレンド(自然流路)出土
8-2	古式土器 小形丸底鉢	復元口径 現存高	10.8cm 5.6cm	口縁部は内脣気味に短く外傾して開く。体部は球形を呈し、底部は平底に仕上げる。	口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内外面ともナア。底部外面には横位ケズリ。	色調 内面:にぶい黄褐色 外面:にぶい黄褐色 胎土 密 焼成 良好	
8-3	古式土器 小形丸底鉢	復元口径 現存高	10.4cm 6.4cm	口縁部は内脣気味に短く外傾して開く。体部は球形を呈する。	口縁部内面はヨコナデ、外表面は横位ミガキ。 体部内面はナア、外表面は横位ミガキ。	色調 内面:明赤褐色 外表面:明赤褐色 胎土 密 焼成 良好 その他 内外面の一部に煤付着	
8-4	古式土器 小形丸底鉢	復元口径 現存高	13.6cm 7.1cm	口縁部は内脣気味に短く外傾して開く。体部はやや肩のはった球形を呈する。口縁部と体部との接線は明瞭。	口縁部内面は継位ミガキのち横位ミガキ、外表面は横位ミガキ。体部内面は横位ミガキ、外表面は継位ケズリののち横位ミガキ。	色調 内面:明赤褐色 外表面:明赤褐色 胎土 密 焼成 良好 その他 内外面の一部に煤付着	
8-5	古式土器 小形丸底鉢	復元口径 現存高	12.4cm 3.5cm	口縁部は内脣気味に短く外傾して開く。	口縁部内面は継位ミガキのち横位ミガキ、外表面は横位ミガキ。体部内面はナア、外表面は横位ミガキ。	色調 内面:にぶい黄褐色 外表面:にぶい黄褐色 胎土 密 焼成 良好 その他 内外面の一部に煤付着	
8-6	古式土器 小形丸底鉢	復元口径 現存高	10.4cm 2.3cm	口縁部は直線的に短く外傾して開く。	口縁部内外面はヨコナデ。	色調 内面:黒褐色 外表面:黒色 胎土 密 焼成 良好	
8-7	古式土器 小形器台	復元口径 現存高	9.5cm 3.9cm	体部は内脣気味に外上方にのび、口縁部は外反気味に立ち上がる。脚部との間に貫通孔をもたない。	受部内面は継位ミガキ、外表面は横位ミガキ。口縁部は内外面ともヨコナア。	色調 内面:にぶい赤褐色 外表面:にぶい黄褐色 胎土 密 焼成 良好	
8-8	古式土器 小形器台	復元口径 現存高	11.4cm 3.2cm	体部は内脣気味に外上方にのび、口縁部は外反気味に立ち上がる。口縁端部は内傾する面をもつ。	体部下半はナア、その他内外面ともヨコナデ。	色調 内面:橙色 外表面:橙色 胎土 密 焼成 良好	

捕獲番号	器種・器形	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成・その他	出土位置	
8-9	古式土師器 臺	復元口径 現存高	14.4cm 3.7cm	口縁部は内骨氣味に外傾して開く。口縁端部は内側に肥厚し、丸く仕上げる。	口縁部は内外面ともヨコナア、体部は内外面ともナア。	色調 内面：にぶい黄橙色 外面：にぶい黄褐色 胎土 密 焼成 良好	第1トレンチ（自然流路）出土
8-10	古式土師器 臺	復元口径 現存高	10.6cm 2.9cm	口縁部は外傾して開く。口縁端部は内面に肥厚し丸く仕上げる。	口縁部は内外面ともヨコナア、体部は内外面ともナア。	色調 内面：にぶい黄橙色 外面：にぶい黄橙色 胎土 密 焼成 良好	
8-11	古式土師器 臺	復元口径 現存高	13.6cm 3.3cm	口縁部は内骨氣味に外傾して開く。口縁端部は内側に肥厚し、丸く仕上げる。	口縁部は内外面ともヨコナア、体部は内外面ともナア。	色調 内面：灰黄色 外面：にぶい褐色 胎土 密 焼成 良好	
8-12	古式土師器 臺	復元口径 現存高	12.8cm 1.9cm	口縁部は外反氣味に外傾して開く。口縁端部は内側にやや肥厚し、尖り氣味に仕上げる。	口縁部は内外面ともヨコナア。	色調 内面：にぶい黄橙色 外面：にぶい黄橙色 胎土 やや粗 焼成 良好	
8-13	古式土師器 臺	復元口径 現存高	14.4cm 9.6cm	口縁部は内骨氣味に外傾して開く。口縁端部は内側に肥厚し、丸く仕上げる。体部は球形を呈する。	口縁部は内外面ともヨコナア、体部内面はケズリ。肩部内面は横位ハケののちヨコナア。	色調 内面：灰黄色 外面：にぶい黄橙色 胎土 密 焼成 良好 その他 外面に擦付着	
8-14	古式土師器 広口臺	復元口径 現存高	15.4cm 4.1cm	口縁部はやや外反氣味に開き、口縁端部は丸V。	口縁部内外面ともヨコナア。	色調 内面：にぶい黄橙色 外面：灰褐色 胎土 密 焼成 良好	
8-15	古式土師器 臺	復元口径 現存高	15.6cm 6.9cm	口縁部はやや内骨氣味に外傾する。体部は張り出さない。口縁端部は外側に肥厚し水平な端面を形成する。	口縁部内面はヨコナア、外面は横位ハケ。体部内面は縱位ケズリ、外面は縱位ハケ。	色調 内面：にぶい黄橙色 外面：褐色 胎土 密 焼成 良好	
8-16	古式土師器 (S字状口縁臺)	復元口径 現存高	13.6cm 2.0cm	口縁部は強く屈曲し、上段が外反氣味に開く。	口縁部は内外面ともヨコナア。	色調 内面：にぶい黄橙色 外面：灰褐色 胎土 密 焼成 良好	
8-17	古式土師器 (S字状口縁臺)	復元口径 現存高	-cm 3.7cm		口縁部は内外面ともヨコナア。体部外側は縱位ハケののち横位ハケ、内面はナア。	色調 内面：にぶい黄橙色 外面：にぶい黄橙色 胎土 密 焼成 良好	
8-18	古式土師器 臺	底径 現存高	4.4cm 6.0cm	底部はやや窪んだ平底。	内外面ともナア	色調 内面：暗灰褐色 外面：黄褐色 胎土 密 焼成 良好 その他 内面に墨、炭化物、外面上に擦付着	

掲図番号	器種・器形	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成・その他	出土位置	
8-19	古式土師器 臺	復元底径 現存高	5.2cm 1.6cm	底部はやや窪んだ平底。	内外面ともナデ	色調 内面: 淡黄色 外面: 黄灰色 胎土 密 焼成 良好 その他 外面に焼付着	第1トレンド チ(自然流路)出土
8-20	古式土師器 臺	復元底径 現存高	3.4cm 3.1cm	底部はやや張り出した平底。	内外面ともナデ	色調 内面: 黒色 外面: にぶい赤褐色 胎土 粗 焼成 良好 その他 2次焼成	
9-1	須恵器 臺				内面は同心円文叩き、 外面は平行叩きののち、横方向のカキ目。	色調 内面: 青灰色 外面: 青灰色 胎土 密 焼成 堅緻	第1トレンド チ出土
9-2	土師器 土釜 (広口型土釜)	復元口径 現存高	24.2cm 2.1cm	口縁部を外反状に形成し、口縁端部は上方にのびる。	内外面ともヨコナデ。	色調 内面: にぶい黄褐色 外面: にぶい褐色 胎土 やや粗 焼成 良好	
9-3	瓦器	復元高台径 現存高	4.6cm 0.8cm	高台は、やや外傾し、端部はやや丸い。	内外面ともヨコナデ。	色調 内面: - 外面: 暗灰色 胎土 密 焼成 良好	
9-4	磁器	復元口径 現存高	11.2cm 2.4cm	口縁部は、やや内擇気味に外上方にのびる。		色調 内面: 明黄褐色 外面: 明黄褐色 胎土 焼成	
9-5	土師器 皿	復元口径 現存高	9.8cm 0.9cm	口縁部は外板状に直線的に立ち上がり、端部は尖り気味。底部外面は中央がやや窪む。	口縁部は内外面ともヨコナデ、底部外面は指圧痕、ナデ。	色調 内面: にぶい黄褐色 外面: にぶい褐色 胎土 密 焼成 良好	第3トレンド チ出土
9-6	土師器 皿	復元口径 現存高	8.8cm 1.3cm	口縁部は内擇気味に丸みをもって立ち上がりる。底部はやや丸みをもつ。	口縁部は内外面ともヨコナデ。底部内面はナデ、底部外面は指圧痕、ナデ。	色調 内面: 橙色 外面: 橙色 胎土 密 焼成 良好	
9-7	中世須恵器 擂鉢 (東播系擂鉢)	復元口径 現存高	-cm 3.4cm	口縁端部を受口状に上 下に肥厚させる。	内外面ともヨコナデ。	色調 内面: 灰色 外面: 青灰色 胎土 密 焼成 堅緻	
9-8	磁器 皿	復元口径 現存高	11.4cm 2.5cm	口縁部はやや内擇気味 に外上方にのびる。	内外面ともヨコナデ。	色調 内面: 明緑灰色(釉薬) 外面: 灰白色 胎土 精良 焼成 堅緻	

のびる。明黄褐色を呈する。第1トレンチからの出土である。8は皿の破片で、復元口径11.4cm、現存高2.5cmをはかる。口縁部は、やや内縫気味に外上方にのびる。内面は明緑灰色、外面は灰白を呈する。第1トレンチからの出土である。

中世須恵器（図9-7、表2）

須恵質の摺鉢である。口縁端部を受口状に上下に肥厚させる。内面は灰色、外面は青灰色を呈する。

小片のため口径は復元できない。第3トレンチ（第3層）からの出土である。

砥石（図10）

A面とB面は、いずれも使用面であり、わずかに研磨痕が認められる。他面はいずれも欠損面である。現存長4.7cm、現存幅2.1cm、厚さ0.4cmを測る。第2トレンチからの出土である。

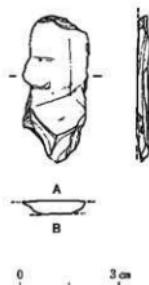


図10 染牧市場西塙内
遺跡出土
砥石実測図

3 ま と め

第1トレンチで確認した自然流路の一部は、旧西谷川のものではなく、西方から西谷川へと灌ぐ旧小支流のものと考えられ、調査地北隣の山裾には、現在の小支流が西谷川へと流れている。第1トレンチ周辺は工事計画によると掘削等が自然流路検出面にまで及ぼず、また、ほ場整備工事という性格上、自然流路の全面的な発掘調査を行っていない。このため、流路幅は明らかにできないが、周辺地形を勘案しても幅10m程度の小規模なものと推定される。流路の土層は基本的には砂と粘土の互層となっており、大きな礫は含んでいないことから、通常は上流からの涌水を集めて流れていたものと考えられる。したがって、河道内には人為的な護岸等の施設は認められない。各層からは古式土師器等の遺物が出土しており、最下層は植物遺体や種子、焼木片等も含んでいる。遺物は、上・下・最下層に大別して取り上げたが、古式土師器に明確な時期差は認められず、これらは布留1式に比定できる。このことから、自然流路は4世紀後葉に機能していたものと推定され、上流域及びその周辺に当期の集落等の存在が予想されるが、その範囲等は、現段階では明らかにできない。

また、わずかではあるが、東海系のS字状口縁甕も出土している。近年の発掘調査によって、その数量は多くないものの高田垣内遺跡、谷遺跡、戸石・辰巳前遺跡、本郷遺跡群、上片岡遺跡、坊ノ浦遺跡をはじめ各所で出土していることが明らかとなっている。東海系のS字状口縁甕を中心とする土器群が生内式期～布留式期にかけて普遍的に出土することから、宇陀地域そのものに東海系土器の製作者の存在も想定されている。

東方約400mの内牧川右岸の河岸段丘上に広がる坊ノ浦遺跡では、弥生時代後期、古墳時代前期～後期の遺物がまとめて出土しており、両遺跡とも内牧川流域の開発の歴史を考える上において重要な位置にある。

4 抄 錄

遺 跡 名	桧牧市場西垣内遺跡（榛原町遺跡地図番号2-626、奈良県遺跡地図番号15-B-555）
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字桧牧 798、799、213-1、214-1番地
遺 跡 立 地	標高約313～340mの谷部
遺 跡 規 模	南北約250m、東西約300m
種 別	弥生時代～古墳時代、中世の遺物散布地
調 査 主 体	榛原町教育委員会
調 査 原 因	は場整備工事
現地調査期間	1998年（平成10）12月24日～1999年（平成11）3月31日
発掘調査	1998年（平成10）12月24日～同年12月26日
立会調査	1999年（平成11）3月1日～同年3月31日（適宜）
調 査 面 積	204m ²
検 出 遺 構	自然流路、素掘溝
検 出 遺 物	サヌカイト剝片、古式土師器、須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器、砥石 (整理箱1箱)
資料等の保管	榛原町教育委員会 生涯学習課（文化財整理室）

参考文献 寺沢 薫他 1986「矢部遺跡」 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県教育委員会
楠元哲夫他 1991「高田垣内古墳群」 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第63冊 奈良県教育委員会
楠元哲夫他 1984「宇陀地方の遺跡調査－昭和58年度－」『奈良県遺跡調査概報』1983年度(第2分冊)
奈良県立橿原考古学研究所
松本洋明他 1985「宇陀地方の遺跡調査－昭和59年度－」『奈良県遺跡調査概報』1984年度(第2分冊)
奈良県立橿原考古学研究所

IV 坊ノ浦遺跡第3次発掘調査概要Ⅱ

1 位置と環境

坊ノ浦遺跡は、榛原町の市街地から南東約3kmの山間部に位置し、宇陀流域の主要河川である宇陀川の支流である内牧川によって形成された河岸段丘を中心とした標高約310m～330mの水田地帯に広がっている。この河岸段丘の大半は、古くから遺物散布地として知られており、「桧牧庄」の一部とも推定してきたところでもある。

周辺の主な遺跡としては、中世山城の桧牧城跡、奈良時代～中世の遺物散布地である内牧小学校

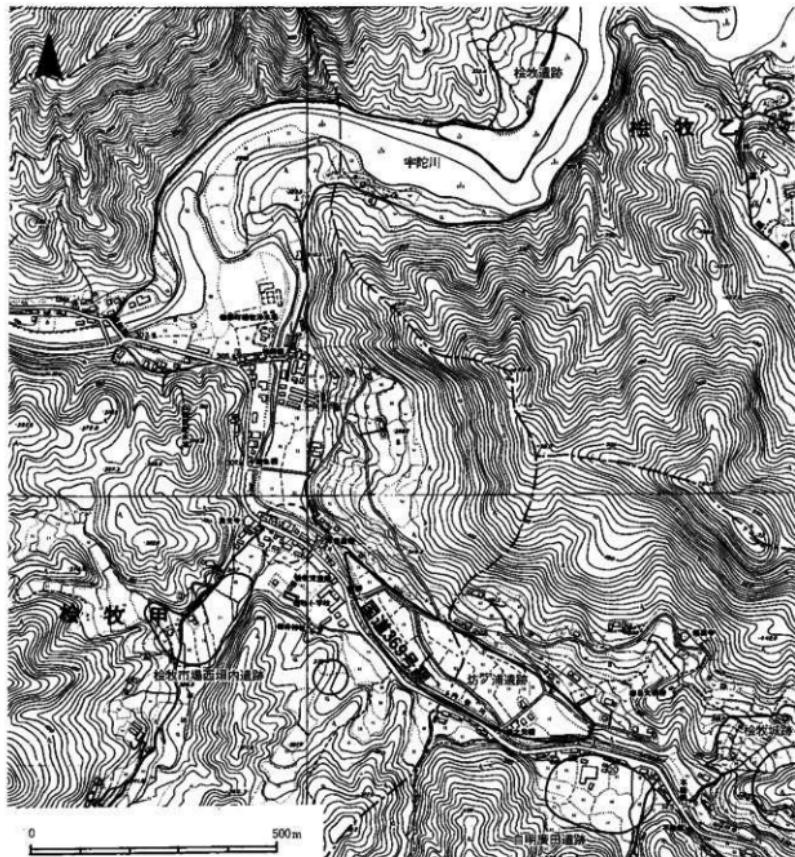


図10 坊ノ浦遺跡と周辺遺跡位置図

遺跡、西南約1kmのところには、縄文時代・奈良時代・中世の集落跡の高井遺跡がある。対岸には『延喜式』に記された「御井神社」が鎮座し、遺跡東方の山腹には白鳳時代の誕生駕迎仏立像（重要文化財）を所蔵する悟真寺もある。遺跡西側の内牧川沿いには、大和と伊勢とを結ぶ「伊勢本街道」が通り、現在、その役割は国道369号線が担っている（図10）。

2 遺 跡 の 調 査

(1) 調 査 対 象 地

工事予定地である水田の大半を調査対象としており（図11）、1998年（平成10）には、31カ所のトレチを設定し、試掘調査を実施^①した。

1999年（平成11）には、1カ所の試掘調査と、第5・7・9・10・11・12・13・14・17・19トレチにおいて、その調査範囲を拡張し、本調査を行った（図12、表3）。

(2) 基 本 土 層

基本土層は、トレチによって若干の相違は認められるものの、多くの遺構を検出した本調査地においては、第1層が耕作土、第2層が水田床土、第3層が褐色系または灰色系の遺物包含層（中世）となっている。第3層の下は、多くが地山面となっており、各時期の遺構が広がっている。また、一部において縄文時代の包含層である第4層の広がりも認められる。

本書には第9トレチの土層断面図の一部（図13）を示しておく。

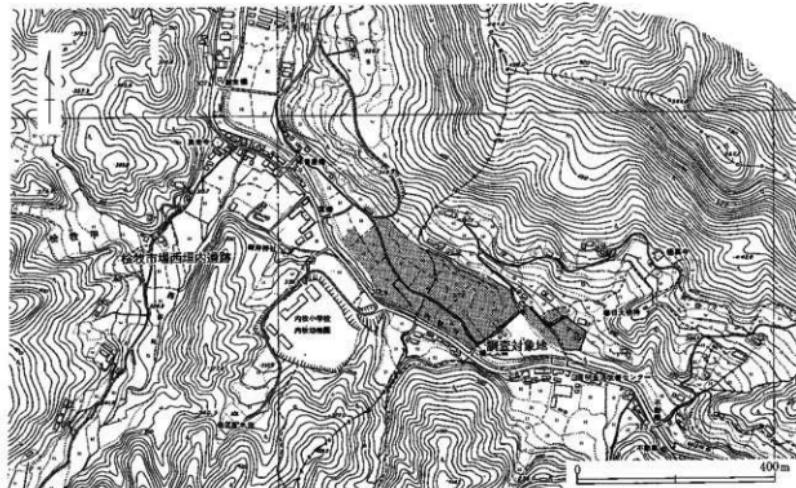
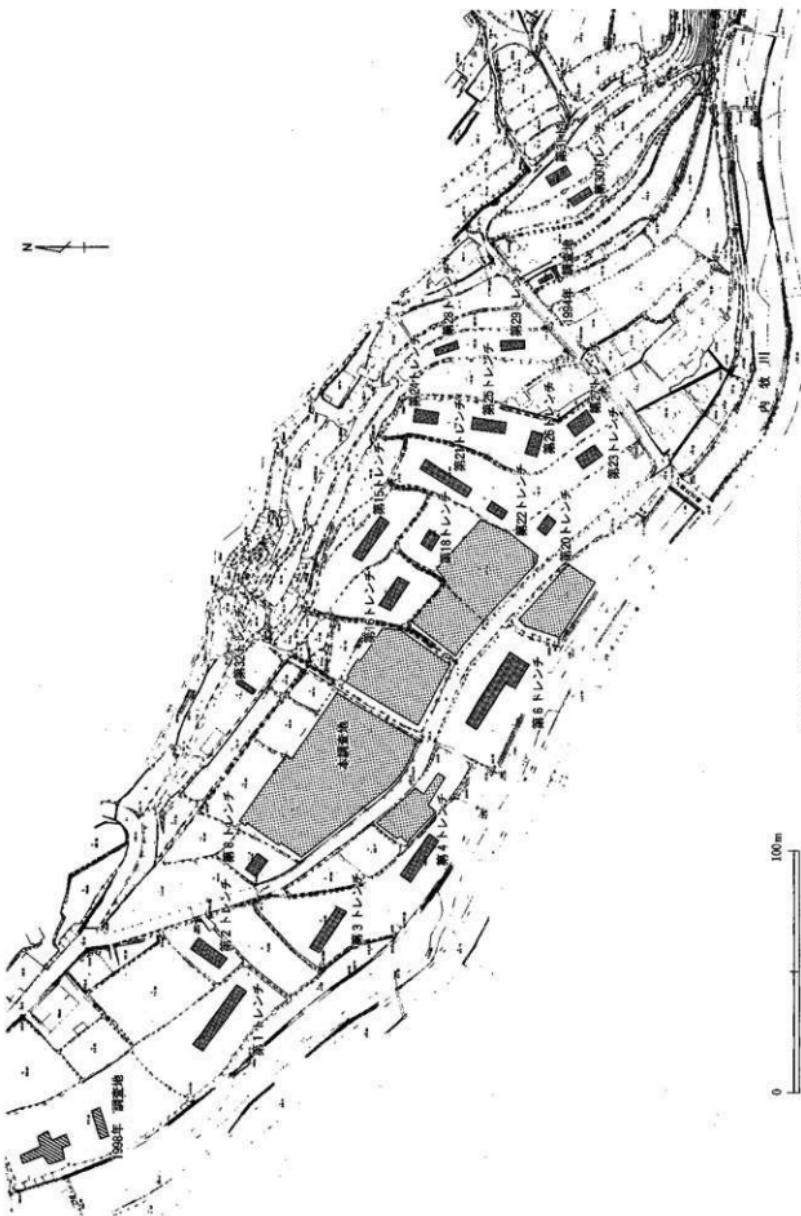


図11 坊ノ浦遺跡調査対象地位置図

図12 坊ノ浦港跡調査位置図



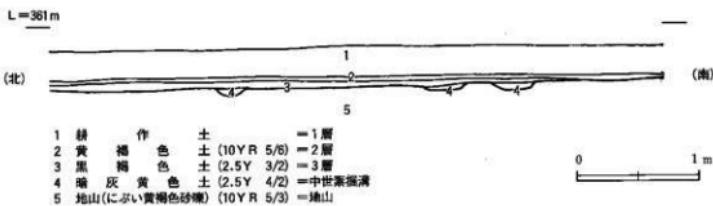


図13 坊ノ浦遺跡第9トレンチ土層断面図（部分）

(3) 検出遺構（図版4～9）

以下、時代順にその概要を列挙する。

縄文時代

調査地の各所で早期・後期を中心とする縄文土器等が出土している。縄文時代の遺構面は、後世に削平されたため、数基の土坑（図版6）や自然地形を確認しているにすぎない。中世の遺物包含層からは、草創期の有茎尖頭器も出土している。この他の遺物としては、石鎌、削器、搔器、楔形石器、叩石、磨石、サヌカイト石核・剝片等などがある。

弥生時代

弥生時代後期の溝1条を確認している（図版8）。溝内からは、縄文土器や弥生土器等が出土している。また、調査地の各所で少量の弥生土器片（大和Ⅲ様式～IV-4様式⁽²⁾）が出土しているが、遺構の状況は明らかにできない。

古墳時代

方形の竪穴住居23棟、掘立柱建物3棟の他、水路、多数の土坑・ピット・溝、などを確認している。（図版5・7～9）。遺構・遺物の検出状況から、本調査地全体にわたって古墳時代の集落が広がっていたようである。住居内からは、古式土師器、須恵器、土師器などの土器類、鉄刀子、鐵鎌、碧玉製管玉、滑石製勾玉、堅櫛などが出土したものもある。また、8棟の竪穴住居の一辺には、カマドが設けられていた。竪穴住居は最大で一辺約7m、最小で約3mの規模となっているが、これらの大半は、中世に大きく削平されており、本来の深さは明らかではない。本調査地の南東端には、3棟からなる掘立柱建物群が認められ、2棟が2間×2間（約3m×約3m）、1棟が2間×3間（約3m×約4m）となっている。

調査地を縱断するかのように3条の溝（水路）も穿たれている。内牧川から導水を行ったものであろう。なお、9棟の竪穴住居は、この溝によってその一部が穿たれている。各溝の中からは、縄文土器、石鎌、サヌカイト片、須恵器、土師器などが出土している。

この集落は、4世紀前葉、5世紀中葉～後葉にかけて営まれ、溝は5世紀後葉～末葉に機能していたと考えられる。

飛鳥時代

一部の調査地において少量の須恵器片が出土しているが、遺構については、明らかにできない。

平安時代～室町時代

試掘調査を含めた調査地の全域から、素掘溝や土坑、ピット等を検出している。本調査地の北西

部分には、掘立柱建物6棟以上を確認し、今後の検討によっては、もう少しその数は増加することも考えられる（図版5）。

本調査地の北西端に、重複した3棟の掘立柱建物（1間×2間 1棟、2間×3間 1棟、4間×4間 1棟）、南西端には3棟の掘立柱建物（1間×1間 1棟、2間×2間 1棟、2間×3間 1棟）が認められる。これらの掘立柱建物の柱穴内から出土した土器類は、古いもので10世紀後葉、新しいもので11世紀代のもので、これらは、掘立柱建物の建築年代の一端を示しているものであろう。また、柱穴の底には、柱を支える根石を据えたものや柱の痕跡を留めたものも認められた。

一方、多数を占める素掘溝は、掘立柱建物との関係や溝の新旧関係、溝内から出土した土器等から概ね11世紀、12世紀、13世紀の3時期が考えられる。

この時期の遺物には、黒色土器、瓦器、土師器、瓦質土器、陶磁器、輸入陶磁器、石製品（丸玉・砥石等）、土錘、鉄釘、鉄滓、フイゴ羽口、錢貨（開元通寶）等があり、第3層の包含層からの出土量が最も多い。

(4) 出 土 遺 物

出土遺物のうち、縄文土器と石器の一部について触れておく。

縄文土器（図14・15）

縄文土器は一部の縄文時代包含層（4層）出土のものを除き、その殆どが攪乱された状況で出土している。出土した土器は早期から晩期まで認められ、量的には早期前半の押型文土器と、中期末～後期前葉にかけてのものが多い。紙幅の制約上、一部ではあるが口縁部破片を中心に報告する。

石器では、草創期にまで遡り得る有茎尖頭器が出土しているが、縄文土器ではこの時期のものは認められない。

早期 1～5は押型文土器である。1は強く外反する口縁部片で、いわゆるネガティヴな梢円文を縦位に施文する。口縁端部は面取りし、そこに縄文を施す。大川式に該当する。2は薄手の土器で、1に比べ外反は弱い。口縁部は丸くおさめ、上端に刻みを施す。外面には格子目文を施文する。神宮寺式の特徴を持ちながら、口縁上端を刻む点は大川式の要素を残す。両者の過渡期に位置づけられよう。3は2と同様に丸くおさめる口縁部で、口縁の外側を刻む。文様は口縁下に山形文、その下部に梢円文を施文する。神宮寺式である。4は内外面ともに山形文を施文するもの。瀬戸内の黄島式併行期に位置づけられよう。5は厚手の土器で、外面にポジティヴな梢円文を施文する。内面にはいわゆる原体条痕が認められる。早期中葉の高山寺式にあたる。

6は早期後半の条痕文土器である。波状口縁で、口縁端部を刻む。施文は3条の隆帯を低く貼り付け、そこに刻みを施す。3条目の隆帯は波状を呈する。東海の入海II式にあたる。胎土中への繊維の混入は殆ど確認できない。

中期末～晩期 7・8は中期末に相当しよう。7は縄文を施す隆帯で口縁部文様帶を区分する。口縁部文様帶は半円状の沈線を中央に配し、その周りに弧状の沈線を施文する。脇部は縦位の沈線と、縄文L Rを帯状に垂下させる。8は突起である。口縁は内彎させ、端部を拡張して突起を形成する。外面は横位沈線で施文、突起頂部にも縄文と沈線を1条施す。これらは北白川C式の範疇で捉えられよう。

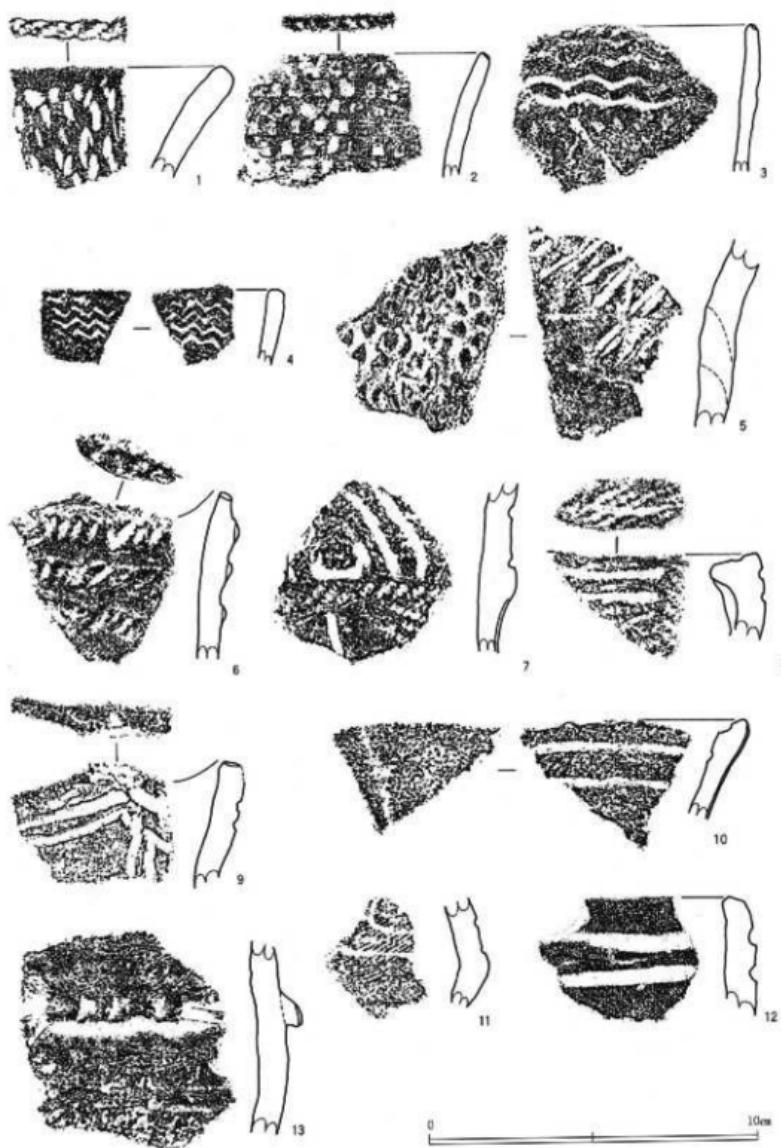


図14 坊ノ浦遺跡出土縄文土器実測図

9は波状口縁で、口縁に平行させて2条沈線を施す。また、波頂部よりやや下りて、縦位方向に沈線をおろす。口縁は波頂部に円形の刺突を施す。後期初頭の中津式に相当すると考えられるが、沈線同士が連結しない点や、沈線間の狭さなどから、中津式でも新段階で捉えられる。

10・11は後期前葉にあるもの。10は外反する立ち上がりで、口縁部は内側に拡張させる。外面には斜行する沈線を、内面に横位の沈線を2条施す。11は外に開きながら立ち上がり、頸部で屈曲させて口縁部は内傾する器形である。文様は細い沈線で、頸部に横位沈線と、その上に楕円形状を呈する沈線を施す。器形から判断すると、浅鉢の可能性が考えられる。これらは後期前葉の北白川上層式で捉えられ、このうち10は2～3期、11は1～2期に相当しよう。⁽³⁾

12は内傾する口縁で、2条の沈線で施す。沈線は平行ではない。後期末葉の滋賀里I式に相当する。排土からの採集品である。

13は晩期の凸帯文土器。肩部の破片で、肩に1条の凸帯を巡らす。凸帯は上端をなでつけて貼り付ける。凸帯上にはD字状の刻みを施す。凸帯下はケズリを施す。船橋式に該当する。

14～16は後期の半粗製土器、および無文の粗製土器である。14は口縁下に1条の沈線を巡らすもの。口縁下でゆるく屈曲させ、なだらかに底部にいたる深鉢である。器面は全体を粗く研磨して仕上げる。口縁端部は面取りする。復元口径24.0cm、現存高18.6cmを測る。15は縄文を施すもの。外面に縄文L Rを施す。深鉢の底部であるが、底面を欠失する。立ち上がりは直に立ち、ゆるく外反気味に開く器形である。復元底径11.8cm、現存高5.4cmを測る。16は無文土器。器形は外に開く深鉢で、内外面とも条痕で調整し仕上げる。口縁端部にも条痕が認められる。復元口径34.0cm、現存高5.8cmを測る。

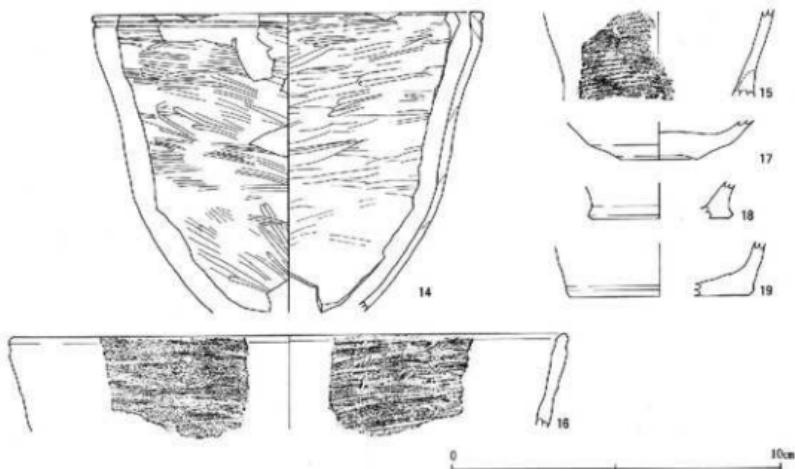


図15 坊ノ浦遺跡出土縄文土器実測図(2)

17~19は底部である。17は浅鉢の底部で器形は外に開き、途中で軽く屈曲する。底は上げ底を呈する。調整はナデ。底径4.8cm、現存高2.3cmを測る。18・19は深鉢の底部。18は底部が張り出す平底で、一度強く屈曲させて立ち上がる。調整はナデ。復元底径8.6cm、現存高2.3cmを測る。19は直に立ち上がる平底である。調整はナデ。復元底径11.0cm、現存高3.3cmを測る。

(縄文土器の項 横澤 慎)

石器 (図16、表4)

草創期の有茎尖頭器をはじめ、石鏸、削器、搔器、楔形石器、叩石、磨石、サヌカイト石核など、約230点が出土している。サヌカイト剝片などを含めるとその数は更に多くなる。これらのうち、有茎尖頭器1点、石鏸21点、使用痕剝片1点、計23点を図示した。これらの詳細は、表3の属性表にまとめた。

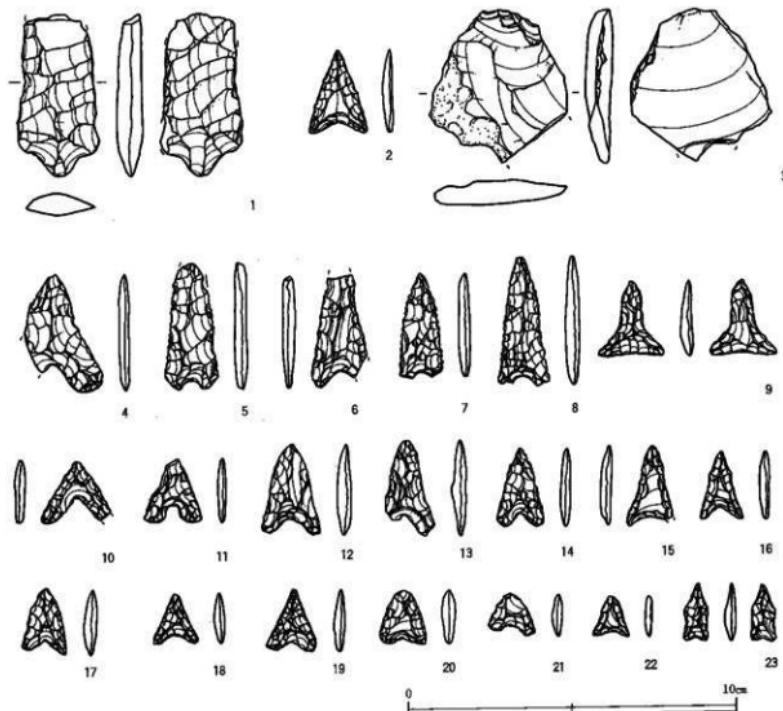


図16 坊ノ浦遺跡出土石器実測図

表 4 坊ノ浦遺跡出土石器属性表

編目号	器種	遺構(底床)	層位	石材	刃端加工	断面加工	断面形状	押圧の幅 (mm)	幅(mm)	長(mm)	厚(mm)	備考
16-1	有茎尖頭器		3層	サヌカイト	SP	SP	SI		50.2	25.2	8.3	埋没後の摩耗激しい
16-2	石鏨 (凹基無茎縫)	SK401		サヌカイト	SP	SP		3.5	25.4	17.7	3.1	
16-3	石鏨 (凹基無茎縫)	SK401		サヌカイト	SP	SP	HvD		47.5	42.5	8.8	右側刃に使用痕
16-4	石鏨 (凹基無茎縫)	土坑		サヌカイト	SP	SP		4.5	36.0	23.4	3.5	
16-5	石鏨 (凹基無茎縫)		3層	サヌカイト	SP/鋸齒	SP		5.0	38.3	16.0	4.1	鋸齒線
16-6	石鏨 (凹基無茎縫)		3層~遺構面	サヌカイト	SP	SP		4.5	33.9	16.9	4.1	
16-7	石鏨 (凹基無茎縫)		3層~遺構面	サヌカイト	SP/鋸齒	SP		5.5	31.7	13.0	3.7	鋸齒線
16-8	石鏨 (凹基無茎縫)		3層	サヌカイト	SP/鋸齒	SP		4.0	39.4	15.5	4.7	鋸齒線
16-9	石鏨 (平基無茎縫)	SD304	探集	サヌカイト	SP	SP		4.0	23.2	19.9	4.1	側線が内湾
16-10	石鏨 (凹基無茎縫)	SD302	採集	サヌカイト	SP	SP		3.5	19.2	20.6	3.4	抜りの後に脚を加工?
16-11	石鏨 (凹基無茎縫)	SB320	採集	サヌカイト	SP	SP		3.5	19.5	17.7	2.6	
16-12	石鏨 (凹基無茎縫)	SD302	採集	サヌカイト	SP	SP		4.0	26.9	17.7	4.6	
16-13	石鏨 (凹基無茎縫)	SD302	遺構面	サヌカイト	SP	SP		5.0	28.6	14.9	4.9	
16-14	石鏨 (凹基無茎縫)		遺構面	サヌカイト	SP	SP		3.5	23.7	14.0	3.3	
16-15	石鏨 (凹基無茎縫)		3面	サヌカイト	SP	SP		4.0	24.5	13.8	3.5	
16-16	石鏨 (凹基無茎縫)	SD1005		サヌカイト	SP	SP		3.0	20.8	12.6	3.2	
16-17	石鏨 (凹基無茎縫)	SD302		サヌカイト	SP	SP		4.5	19.5	12.8	4.3	
16-18	石鏨 (凹基無茎縫)		3層	サヌカイト	SP	SP		3.0	15.1	13.5	3.5	
16-19	石鏨 (凹基無茎縫)	SD302		珪質岩	SP	SP		3.0	18.5	15.1	3.8	抜りの後に脚を加工
16-20	石鏨 (凹基無茎縫)		探集	サヌカイト	SP	SP		3.0	16.5	13.9	4.3	
16-21	石鏨 (凹基無茎縫)	SD302		サヌカイト	SP	SP		3.0	12.6	14.1	3.4	
16-22	石鏨 (凹基無茎縫)	SD305		サヌカイト	SP	SP		3.0	12.2	10.6	2.3	
16-23	石鏨 (凹基無茎縫)	SD1020		サヌカイト	SP	SP		3.0	17.3	7.4	3.5	

配列例

S P 枹質ハシマー・神丘剣體

S I 枹質ハシマー・間接打撃

H v D 保質ハシマー・直接打撃

3 まとめ

以下の遺構および遺物についての所見は、遺物整理途中段階のものであり、詳細については、本報告で報告していきたい。

縄文時代

坊ノ浦遺跡から出土している縄文土器は、以上のように早期から晩期までのものが認められる。このうち、主体を占めるのは早期前半の押型文土器と、中期末～後期前葉のものである。押型文土器は大川式から高山寺式までが確認されており、その中でも神宮寺式が目立つ。

特筆すべきものとしては、早期末葉から前期の土器の出土である。本概報では、入海II式1点を示したが、他に織維土器や前期の条痕を施す体部破片が出土している。この時期の資料は県内でも事例が少なく、今回の資料は該期の様相を知るうえで重要であろう。株原町内でも近年この時期の資料が増加している。^④

中期末から後期前葉の土器は、北白川C式と北白川上層式が主体をなすが、少ないながらも中津式～福田K II式期かと思われる資料も存在する。北白川上層式は1期～3期まで認められる。その後空白があり、後期末の滋賀里I式が2点、晩期の船橋式が1点のみ出土している。後期の条線施文土器や縄文施文土器、後期・晩期の無文土器も相当量出土している。（縄文時代の項 横澤）

弥生時代

内牧川流域では、初めてこの時期の遺構・遺物を検出することができ、当地の新たな開発は、弥生時代（大和III様式～IV-4様式）にまで遡ることが明らかとなった。

古墳時代

中世の「ほ場整備」によって、建物の多くは削られていたが、ひとつの遺跡で確認した建物の棟数としては、極めて多いものとなった。町内では、笠間に所在する石榴垣内遺跡（竪穴住居20棟、掘立柱建物45棟、5世紀末葉～8世紀前葉）と並ぶ比較的大きい集落だったようである。坊ノ浦遺跡の集落は、4世紀前葉、5世紀中葉～後葉に営まれたことが明らかとなった。この時期の集落としては、今回の検出例が最多のものとなる。

宇陀は、大和と伊勢・伊賀をはじめとした東国とを結ぶ交通の要衝にあり、坊ノ浦遺跡も主要道の一つに接している。この遺跡の周辺では、これまでに古墳時代前葉から後葉の集落や古墳などが認められないが、4世紀前葉にこの地に集落が出現し、その後、一次、断絶するものの、5世紀中葉～後葉集落が展開される。

平安時代～室町時代

当地は、『東寺百合文書』にも記載されている「檜牧庄」の一部とも推定してきたところであり、今回の発掘調査によって検出した遺構は、「檜牧庄」の一部を構成していたものであろう。『東寺百合文書』によると肥伊牧の停止以後、地元の豪族・県氏が当地を開拓し、11世紀前半には、藤原氏がこの莊園の寄進を受けている。また建久9年（1198）以降は、皇族が領主（本家職）となり、そのもとで重層的に莊園經營が行われている。貞治元年（1362）には、領主（預家職）が東寺西院御影堂に移り、以後、東寺の影響下に入っている。

試掘調査を含めた調査地の全域から素掘溝、本調査地の北西部には、掘立柱建物群を確認して

いるが、これら遺構の時期から、耕作地のなかに建物が点在する様相（11世紀～）から、やがて建物は他所に移り、耕作地のみへと推移（12世紀～）していったことが考えられる。また、調査対象外のため詳細は明らかにできないが、調査地北東の山腹には、当時の居館跡とも推定される緩傾斜の平坦面が認められ、今後の調査に期するところが大きい。文献資料だけではなく、発掘調査等によって「檜牧庄」の様相の一部が明らかとなつた貴重な遺構群でもある。

4 抄 錄

遺 跡 名	坊ノ浦遺跡（榛原町遺跡地図番号4-3、奈良県遺跡地図番号103-51）
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字松牧1075番地、榛原町大字自明136番地他
遺 跡 立 地	標高約310～330mの河岸段丘・丘陵斜面
遺 跡 規 模	南北：約600m、東西：約200m
種 別	縄文時代～中世の遺物散布地、縄文時代・古墳時代の集落跡、中世の莊園跡
調 査 主 体	榛原町教育委員会
調 査 担 当 者	榛原町教育委員会 生涯学習課 技師 柳澤一宏
調 査 原 因	圃場整備工事（事業主体：榛原町役場）
現地調査期間	1998年（平成10）10月19日～1999年（平成11）12月6日 試掘調査 1998年10月19日～1999年1月28日 本調査 1999年2月1日～1999年12月6日
調 査 面 積	延べ 約7,900m ² 試掘調査 約2,400m ² 本調査 約5,500m ²
検 出 遺 構	縄文時代：土坑、自然地形 弥生時代：溝 古墳時代：竪穴式住居23棟、掘立柱建物3棟、水路3条、溝、土坑、ピット等 中世：掘立柱建物6棟、素掘溝、土坑、ピット等 近世：石垣（旧水田石垣）
検 出 遺 物	縄文時代：縄文土器、有茎尖頭器、石鎌、削器、搔器、楔形石器、叩石、磨石、サヌカイト石核・剥片他 弥生時代：弥生土器 古墳時代：古式土師器、須恵器、土師器、韓式土器、製塙土器、鉄刀子、鉄鎌、滑石製勾玉、碧玉製管玉、水晶片、砥石他 中世：黒色土器、瓦器、土師器、瓦質土器、陶器、磁器、輸入陶磁器、石製丸玉、砥石、土錘、鉄釘、鉄滓、フイゴ羽口、錢貨（開元通寶） 他 江戸時代：陶器、磁器、錢貨（寛永通寶）
資料等の保管	榛原町教育委員会 生涯学習課（文化財整理室）
	＜整理箱 50箱＞

調査後の措置 工事実施

- 註 (1) 柳澤一宏 2000『榛原町内遺跡発掘調査概要報告書』 1998年度 榛原町文化財調査概要21 榛原町教育委員会
(2) 藤田三郎・松木洋明 1989「大和地域」『弥生土器の様式と編年』 近畿編Ⅰ 木耳社
(3) 泉 拓良 1981「後期の土器 3. 近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4 縄文土器Ⅱ 雄山閣
(4) 柳澤一宏 2001『榛原町内遺跡発掘調査概要報告書』 1999年度 榛原町文化財調査概要22 榛原町教育委員会

下城・馬場遺跡第6次調査において前期の無文土器が、第7次調査において船形式が1点出土している。また、未報告ではあるが、高井遺跡（1986年 榛原町教育委員会調査）でも早期後半の茅山下層式、船形式、入海I式、前期の北白川下層式などを確認している。

参考文献 榛原町史編集委員会 1959 『榛原町史』 榛原町役場



写真2 現地説明会風景(1)



写真3 現地説明会風景(2)

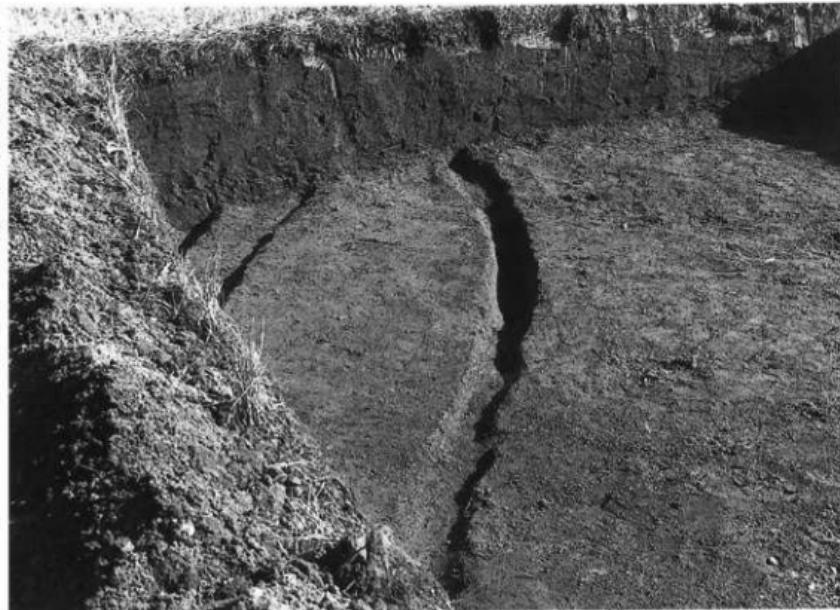
図 版



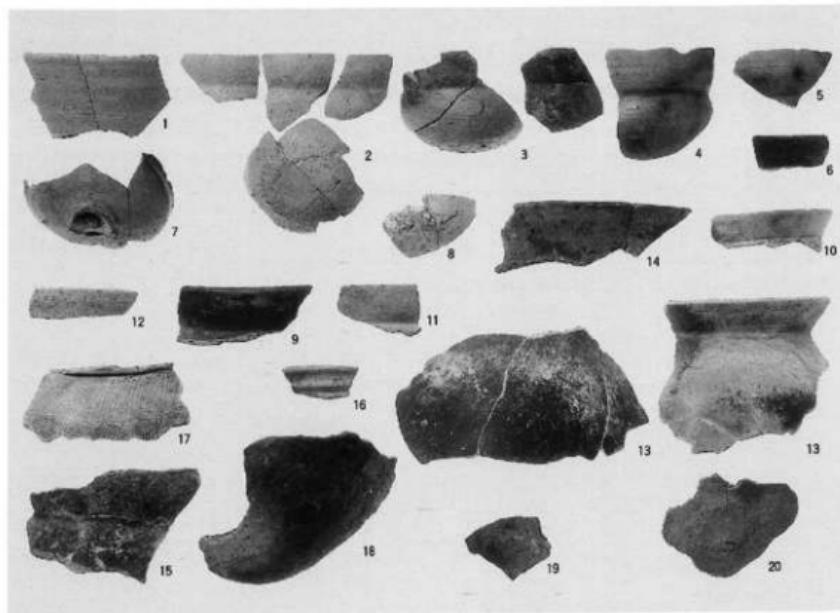
航空写真（1981年撮影）



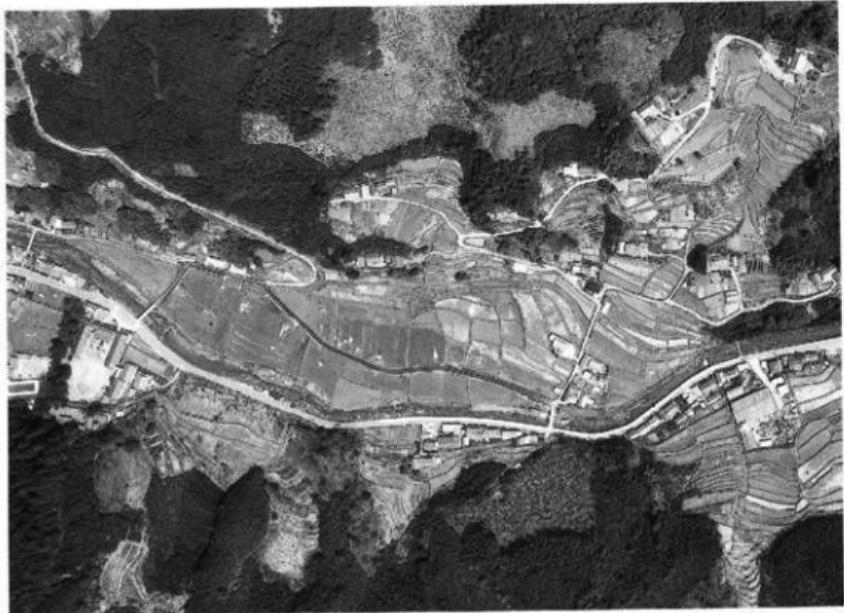
第1トレンチ 自然流路土層断面（北東から）



第3トレンチ 素掘溝（西から）



第1トレンチ 自然流路出土遺物（番号は図8と一致）



航空写真（1981年撮影）



航空写真（南東から）



航空写真（南東から）



航空写真（北西から）



調査地近景（北西から）



水路と竪穴住居跡群（南東から）



縄文時代土坑群（北西から）



縄文土器（図15-14）出土状況（南から）



竪穴住居跡(SB316・317)検出状況と素掘溝（北から）



竪穴住居跡(SB316・317)（北から）



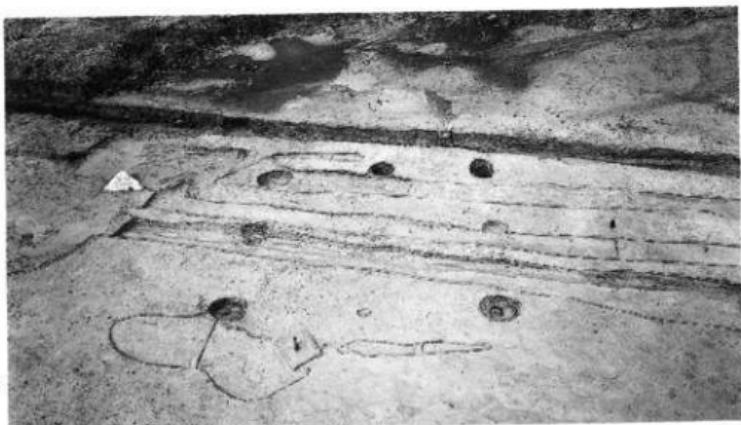
第5トレンチ
〈弥生時代溝〉
(北西から)



中世掘立柱建
物跡と竪穴住
居跡
〈SB318・319〉
検出状況
(北西から)



竪穴住居跡
〈SB318・319〉
(北西から)



掘立柱建物跡
(SB324)
(南西から)



掘立柱建物跡
(SB325)
(南東から)



掘立柱建物跡
(SB326)
(南東から)

報告書抄録

ふりがな	ちゅうさんかんちいきそうごうせいびじきょううちいきまいぞうぶんかさいはつくつちょうさかいようほうこくしょ						
書名	中山間地域総合整備事業地域埋蔵文化財発掘調査概要報告書						
副書名	桧牧市場西垣内遺跡・坊ノ浦遺跡						
卷次							
シリーズ名	榛原町文化財調査概要						
シリーズ番号	24						
編著者名	柳澤一宏、横澤 慎						
編集機関	榛原町教育委員会						
所在地	〒633-0292 奈良県宇陀郡榛原町大字萩原164番地 TEL 0745-82-1301(代)						
発行年月日	西暦 2001年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
ひのまきいちばにしけい 桧牧市場西垣 内遺跡(1次)	奈良県宇陀郡榛原町 大字桧牧798番地 外	29383	34度 31分 10秒	135度 58分 35秒	1998.12.24 1998.12.26	204	ば場整備工事
ひのまき 坊ノ浦 遺跡 (3次)	奈良県宇陀郡榛原町 大字桧牧、自明 地内	29383	34度 31分 08秒	135度 58分 53秒	1998.10.19 1999.12.6	約2400	ば場整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
桧牧市場西垣 内遺跡(1次)	遺物散布地	弥生～古墳 中世	自然流路、素掘 溝	サヌカイト剝片、古 式土師器、須恵器、 土師器、瓦器、陶器、 磁器	上流域に古墳 時代前期の集 落の可能性		
坊ノ浦 遺跡 (3次)	集落跡 莊園跡 遺物散布地	縄文、古墳 中世 縄文～近世	土坑、堅穴住居 跡、掘立柱建物 跡、水路、溝、 ピット、素掘溝、 石垣他	縄文土器、有茎尖頭器、 石器、削器、搔器、楔形石 器、磨石、サヌカイト石 核、剝片、弥生土器、古 式土師器、須恵器、土師 器、韓式土器、製塙土器、 鉄刀子、鉄鎌、滑石製勾 玉、碧玉製管玉、水晶片、 砾石、瓦器、土師器、瓦 質土器、陶器、磁器、石 製丸玉、土錘、鉄釘、鉄 津、繩羽口、錢貨（開元 通宝、寛永通宝）他	縄文時代早期・後期、古 墳時代前期～後期の集落跡 「桧牧荘」の一部を構成す る居館跡・耕作溝等を検出		

中山間地域総合整備事業地域
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

榛原町文化財調査概要 24

2001年 3月30日 発行

編集発行 榛原町教育委員会
奈良県宇陀郡榛原町萩原164番地

印刷 株式会社 アイブリコム
奈良県磯城郡田原本町千代360-1